

家庭菜園の 基礎知識

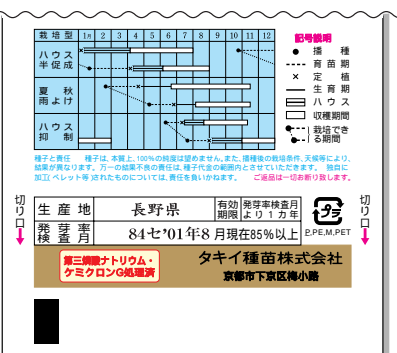
よいタネ種子を 入手するには

野菜の多くはタネをまいて育てるので、まずよいタネを手に入れることが大切なのは申すまでもありません。

よいタネの条件としては、品種の持つ遺伝的特性を十分備えていること
よく充実し、発芽力が優れていること

病害虫に侵されていないこと
タネ以外の混雑物が無いこと
などです。いくら優れた性質の品種でも採種の際に他種と交雑していたり、発芽が悪かったりしては困

第1図 種子袋の裏面記載の例
(「桃太郎ファイト」トマトの場合)



りものなのです。

近年は採種や選別の技術が進歩し、貯蔵設備も完備され、品質管理がよくなってきたので、不良品は大変少なくなってきましたが、何分にもタネは生き物ですから、トラブルが皆無になったわけではありません。裁

野菜作りを はじめよう



第5回 タネと苗の 見分け方・扱い方

板木技術士事務所 所長
板木 利隆

培の基本になるタネですから、十分注意して買い求めることが大切です。

一般的に、タネは農産種苗法により、種類ごとの標準発芽率（何%以上）が定められており、発芽率や採種地などを明示することになっていますから、タネ袋の裏の記載事項第1図）をよく見て、信用のおける発売元で、発芽率（調査時点がいつかも確認）に問題のないものであることを確認してから買い求めるようにしましょう。

多く出回っている種類や品種なら最近では各地の店舗で売られています、特殊なもの（地方野菜、希少品種など）や育成されて間もない新品種などは、一般の店頭では売られていないので、種苗専門店を訪ねた

り、大手種苗会社等から発行されている情報誌、カタログなどを参考に、育成元、系列の販売店から直接求めることになります。新品種などは数量に限りのあるものも多いので、早めの手配が必要です。

余ったタネも 大切に使う

家庭菜園ではタネは少量で足りる場合が多いので、一袋買い求めても余ってしまうことが時々あります。また、容易に入手できない貴重なタネなので、少しずつ大切に使いたいなどという場合もあります。

このような余りタネは、家庭でも上手に保存すれば、翌年、翌々年ま

第2図 使い残ったタネの上手な保存方法



タネを紙の上にのせて日に当て、よく乾かす。黒色のタネは直射日光を避ける。



タネを紙袋に入れて乾燥剤の上に置く。

缶に蓋をし、テープを巻いて密封する。



夏は涼しい所に保管する。

果菜類は一般に高温好みで、育苗に長い日数（ナス・トマト70～80日、

よい苗の入手方法と苗の扱い方

でも、十分発芽力を保たせることができます。簡単な方法は、茶筒や海苔の缶を利用する方法（乾燥状態を保ち、冷暗所に置く）です。
ただし、こうして貯蔵したタネは開封して取り出すとかなり短い日数で発芽力が低下してしまうので、ま

最近は大変早い時期からたくさんの苗が店頭で並ぶようになりましたが、それらは苗の品質面でのばらつきがかなり大きいので、苗質を見分ける目を養って、よい苗を買い求めることが大切です。何しろ果菜類の苗の段階で、収穫果のもとになる重要な花芽がすでにたくさん育っている（大玉トマトの定植適期苗には3段目の花芽までで収穫果10個以上）のですから。

よい苗を選ぶ目のつけどころは、

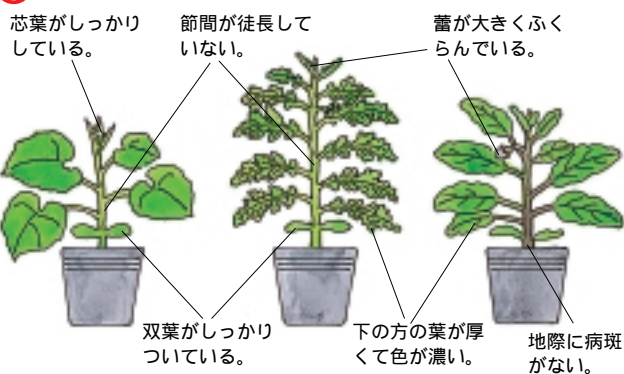
葉の大きさ・厚さ・色、茎の太さ・節間の長さ、蕾の進み具合、病斑の有無などです。根の張り具合も極めて重要ですが、これは店頭で鉢を外して見るわけにもいきません。
次に重要視しなければならぬのは苗全体の大きさ、生長の進み具合です。最

近は苗の需要の高まり（生産農家も購入苗への依存が増大）から大量に苗生産されることが多くなり、小さなポリ鉢（径9cmの3号鉢またはそれ以下の径8・7・5cmの鉢）で流通するものが多くなってきました。特に都市部では小さい鉢のものが主体となりました。したがって苗も小さい状態で出回るようになりました。早く出回り、しかも小苗ですから、それを購入してすぐに植えると、弱い苗が低温にさらされることになるので、植え傷みし、順調に生育しないという結果を招くことが、しば

しばあります。このような苗の上手な扱い方としては、購入してからひと回り大きな鉢に移し替え（53頁第4図）、よい土を足し、日当たりのよい暖かい所で寒さをよけ、水やりなどの管理も入念にして、大苗に仕上げ、十分に暖かくなった畑に植え付けることです。これはどの果菜類にも共通することですが、特に寒さに弱いナスやピーマン、そして若苗を植えると後で育ちすぎて困るトマト（ミニは別）では、この方法で成功率が大変高まるというてよいでしょう。

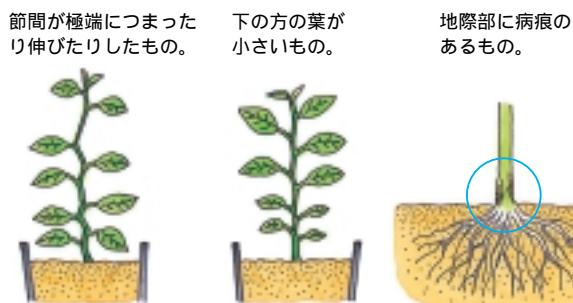
第3図 よい苗の見分け方

○よい苗



ただし、接ぎ木苗は接ぎ方によってついていないものもある（特にトマト、ナス）。

×悪い苗



第4図 小さい苗の仕上げ管理



ひと回り大きな鉢に植え替えた（3号鉢 4号鉢）育苗中の苗。上ノキュウリの苗。本葉4～5枚開いたころ（写真より10日後くらい）に畑に植え付ける。下ノトマトの苗。あと2週間くらいで花が咲き始める。そのころ畑に植え付ける。

植え付け適期の苗。上からナス、ピーマン、スイカ。

タネのまき方

タネまきの方法は野菜の種類（主に草体や根の大きさ、タネの大きさ）や畑の状態（平畝、^{うね}ベッド、プランター）により相異なりますが、代表的なのは **すじまき**、**点まき**、**ばらまき**の三法です。

すじまき

くわでまき溝を列状に作り、溝全



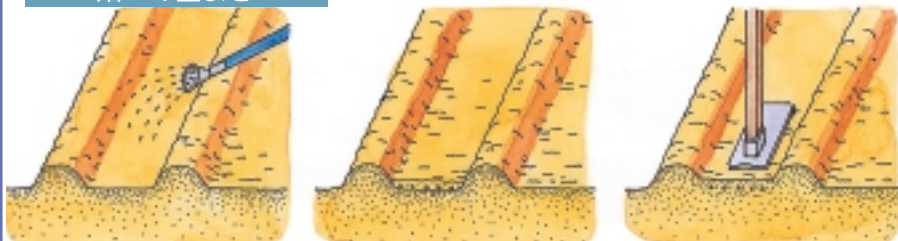
畑ですじまきの作業手順例

- A ひもを張り、タネをまく溝の位置を決める。
- B まき溝に、たっぷりと水分を与えておく。
- C タネをまく。
- D まいたタネの上を薄く土で覆う。

体にタネまきする方法。
コマツナ、ホウレンソウ、シユンギク、コカブなどの、小物葉根菜類には主にこの方法を用います。また、狭い畑を有効に使うベッド栽培やプランター栽培では、板切れなどで小さな溝をつけてタネまきします。これもすじまきの一方法です。溝の底面が平らになるようにして、タネはムラなく丁寧にまき、覆土の厚さをできるだけ均一にするのがそって発芽させるコツです（第5、第6、第7図）。

第5図 すじまきの仕方

畑への直まき



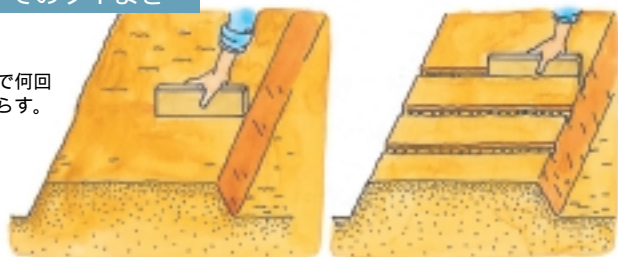
タネをまく前に溝全面に丁寧に灌水しておく。

タネがやっと見えなくなるくらいに浅く覆土する。

覆土した後、くわの背で強めに押さえ、タネと土をなじませる。

ベッドでのタネまき

板切れなどで何回も丁寧に。



幅2cm、深さ1cmくらいの溝をつけてタネをまく。



ベッドでのすじまきの作業手順例

- A 板切れなどでまき溝を作る。
- B 溝に沿ってタネをまく。
- C 溝の両側の土をつまみ寄せて覆土する。
- D 板などを用いて表面を押さえる。手のひらで軽く押さえてもよい。

第6図 浅型育苗箱(ポリトロなど)へのタネのまき方

(コネギ、メジソなどの例)



覆土は細かいふるいをを使い、かすかにタネが見えなくなる程度に薄めにする。



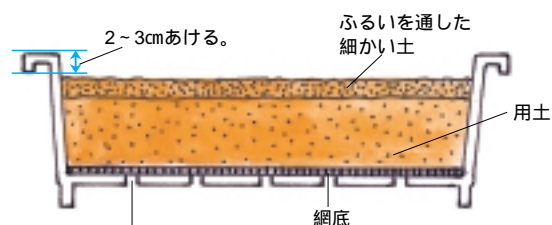
新聞紙をかけて乾燥を防ぐ。



表面を平らにならず。



第7図 プランターでのすじまきの仕方

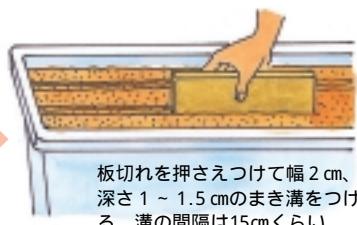


排水口が開いていることを確かめる。

新聞紙を取り遅れると徒長する。



新聞紙は発芽を始めた後、遅れないように取り除く。



板切れを押さえて幅2cm、深さ1~1.5cmのまき溝をつける。溝の間隔は15cmくらい。



タネまきしたら手のひらか板切れで軽く押さえて土を落ち着かせ、たっぷり灌水し、乾かないよう新聞紙を覆う。寒い時期ならその上にさらにビニールをのせる。

点まき

くわや小型の除草ぐわなどで小幅のまき溝または小穴を作り、一定の株間の間隔を設けて点々と数粒ずつのタネをまく方法です。タネが大粒で、一株一株が大きく育つマメ類、スイートコーンなどがこの方法を用います。

ダイコンの場合は、株ごとにジューズのビンなどの底を土に押しつけ、輪状の小溝をつけ、そこに円形にタネをまきつける場合もありますが、これも点まきの変形と見てよいでしょう。

ばらまき

ベッドを作り、表面を板切れなどで丁寧に平らにならし、全面に均一にタネを振りまくようにしてまく方法です。草体が小さく、密に育てるほうが能率のよい、タマネギやネギなどの苗床には、この方法を用います。

タネを少量ずつ、指先でつまみ、もむようにしてばらつかせながらもぐんぐんまくのがコツです。タネが広い範囲に全面にまかれるので、覆土もふるいを用い、全面にムラなくばらまきかけることが大切です。

今月の菜園作業 5月

花も実も人気のオクラをどうぞ

オクラは用途が意外に多く、フヨウに似た黄色の花は夏の観賞用としてもなかなかのもので、身近な庭先菜園やプランターでの栽培におすすめの野菜です。

高温性で、小苗の間は特に寒さに弱く、早植えしすぎると一向に生長が進まずに落葉したりして失敗しがちです。かえって十分暖かくなってから作り始めるのがよく、4月の終わりからタネまきしてもよく育ち、夏の暑さを乗り越えて秋遅くまで収穫し続けることができます。

3号のポリ鉢に4～5粒まきし、育つにつれて間引き、本葉4～5枚で1本立てとし、畑に株間40cmで植え付けします。タネはかたく吸水しにくいので、あらかじめ2～3日ぬるま湯につけ、芽出ししてからまくとよく発芽します。

草丈が30～40cmに伸びるまでは育ちが遅く、その後も葉が掌状五裂なので、あまり込み合いませから、1カ所に

2株ずつ植え付けて栽培します。1株の花数が少ないので、2本立てで花数を確保した方が、収穫果数が増えて得策です。

草丈が1m以上にもなると分枝し、次第に葉が込み合ってくるので、適宜摘葉し、各々の葉に日がよく当たるようにします。

葉色や花の咲き具合をよく観察し、肥料切れさせないように15～20日に1回、1株当たり油かすと化成肥料を各大さじ1杯ぐらい、株の周りに追肥します。

収穫は果の長さが6～7cmで、やわらかなうちにいきます。育ちが早いので、とり遅れないよう注意してください。果梗はかたく、莢はつぶれやすいので、ハサミを使わないとうまく収穫できません。

